

優秀賞

# 「どっちなか」じゃなくして「どっちなせ」

千葉県松戸市立第二中学校二年 本間 乃愛

「のあって、日本人なの？ 外国人なの？」  
小さい頃から、私は何度もこの言葉を耳にしてきた。聞かれる度に言葉が詰まってしまふ。

父は、スペインの外国出身。母は日本人。いわゆる「ハーフ」と呼ばれる立場として、生まれてきた。「いいなあ、ハーフってかっこいいよね。」

と言われることもある。でも、それは表面だけのイメージであって、私の中にある迷いや痛みは誰にも見えていない気がしていた。

私はスペインで生まれ、スペインで育った。学校の友達も言葉も、全部スペインだった。だけど、十歳の時に家庭の事情で日本で暮らすことになった。

両親の言う「帰国」は私にとっての「出発」だった。日本では、自分が想像していたよりも大変だった。周りの子達の話すスピード、話題、空気の読み方。最初はそれらに追いつくのに必死で、息が詰まりそうだった。それでも私は、日本語を頑張って覚えた。

今ではスペイン語よりも、日本語の方が上手く話せる。

けれど、言葉が通じてても、「気持ち」は中々通じなかった。何かを話そうとすると、「帰国子女っぽい」「考え方が外国っぽい」と言われることが多々あった。そう言われる度に、まるで自分が皆とは違う「外」の人間である、と言われてるように感じてしまった。

ある日、クラスで出された自己紹介のスピーチで、私はふと口にしてしまった。

「どこに居ても、私は、完全にここに属している」と思えたことがないんです。」

その時、教室は静まり返った。すると、一人の子が言った。

「でもそれって、ちょっとかっこよくない？」

私はびっくりして、少し笑った。  
家に帰ってその話をする、母は言った。

「あなたは、日本で育った子ども、スペインで暮らす子どもと違うかもしれない。でもそれは、間にいるんじゃないなくて、両方」を持っていてってこと。あなたは一つじゃなくて、二つの世界を知っているのよ。」

その言葉は、私の心の奥で何かを静かにほどこしてくれた。

私は、どちらでもないのではなく、どちらもなのだ。日本語も、スペイン語も。日本の文化も、スペインの思い出も。私は二つの世界をまたいで生きてきた。その経験は、誰にも真似できない私だけの宝物だ。

次に「どっちなの？」と聞かれることがあれば、私は胸を張ってこう答えようと思う。

「私は、どっちでもないんじゃないやなくて、どっちもなんだよ。」

